

1/25(土) まい心! 倫理号です。この冬一番の冷え込みです。

倫理の学びの真髄を発見したい。「心に空所を持つ心はさほど徹底できず、実は本業そのものが趣味にならなければ「到達する」頑張ります。

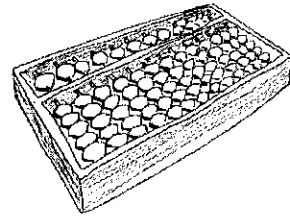
今週の倫理 953号

幸也達郎 一鳥

2015.11.28 ~12.4

十一月のテーマ 文化と経営

変化を捉える 感性を磨け



え・古屋智子

文 化とは何でしょう。どのよう
なものを指して文化と称
するのでしょうか。

『広辞苑』には「(前略)人間が
自然に手を加えて形成してきた物
心両面の成果。衣食住をはじめ科
学・技術・学問・芸術・道徳・宗
教・政治など生活形成の様式と内
容とを含む(後略)」とあります。

一方、倫理運動の創始者・丸山
敏雄は、著書『歓喜の人生』のな
かで、文化について、次のように
記しています。「動物の世界から発
達向上してきた人類のいとなみの
一切が文化生活であり、こうした
働きにより生み出された有形無形
の事物のすべてが文化であり、人
間らしい生活のことごとくが文化
現象である」

「人類のいとなみ」は、言語が違
うように異なり、気象や環境によ
っても異なります。日本のような
島国であっても、異文化と交流す
ることによって文化が変化し、生
活スタイルが大きく変わる場合も
あります。

煎じ詰めれば、人類の進歩に合

わせて変化するのが文化というも
なのでしょう。

そうした文化の変遷によって、
取り扱う商品や業種、業態まで、
経営の手段や方法も変化を余儀な
くされます。それが急激でも、ゆ
るやかでも、文化の変遷は、時代
の潮流とも言い換えられますから、
あらがっても仕方がありません。

例えば、今では生活に欠かせな
いインターネット。これのない時
代にはもう戻らないのであれば、
ネット社会に合わせた経営をしな
ければ、その企業はそう長く存在
できないでしょう。

こうした文化の変化に敏感に対
応できるか否かで企業の寿命が決
するならば、新しい文化の潮流を予
測し、早期に対応できることにこ
したことはありません。

それには、経営者が感性(感度)
を磨いておく必要があります。そ
の磨き方の一つとして、丸山敏雄
は「空所を持つ」と提唱しました。
意識すれば「無心になれる趣味を
持つ」ということです。

空所を持つことで、無心に私利

私欲から離れ、客観的に自身や自
社を見つめる目が養われます。加
えて、冷静に文化の潮流を眺める
感覚が備わり、総合的に「これか
らはこうなる」という感性が磨か
れるというのです。

さらに興味深いことを丸山敏雄
は述べています。

「心に空所を持つことを、さら
に徹底すると、実は本業そのもの
が趣味になってしまおうという境地
に到達する」というのです。

文化には、科学や技術、政治な
ど急激に変化し得る面と、道徳や
宗教などゆるやかに変化する面が
あります。

不易流行というように、経営の
手段や方法は、日々感性を磨き、
瞬時に変化を遂げねば生き残りま
せん。一方で、「ゆるやか」に該当
するのは、心・精神(社是・経営理
念など)であり、この部分は、容易
に時局や時流に流されたら、その
企業の長寿は望めないでしょう。

いずれにしても、経営者は感性
を磨くに越したことはありません。
本業を空所にしたいものです。